朝日教育会議
Asahi Education Forum

同志社×朝日新聞

変化の時代 切り開く人材を

社会が急速に変化するなか、私学が担う役割、人材育成はどうあるべきか。学校法人同志社と朝日新聞社は、同志社創立150周年を記念したシンポジウム「朝日教育会議」を共催。同志社、慶応、早稲田の総長・塾長が将来を見据えて議論しました。【5月17日開催】

基調講演

良心養い社会に生かす 建学の精神継承

同志社総長・理事長 八田英二さん

はった・えいじ 1949年生まれ。同志社大学大学院経済学研究科修士課程修了。米国カリフォルニア大学バークリー校大学院経済学博士課程修了(Ph.D.)。同志社大学経済学部長、大学長などを歴任し、2017年から現職。日本学生野球協会会長なども務める。

1875年、新島襄によって同志社英学校が設立され、「キリスト教主義」「国際主義」「自由主義」の理念の下、一貫教育を担う総合学園に発展してきました。

原点にあるのは新島の強い志です。21歳の時に国禁を犯して函館から脱国し、米国へ渡ります。10年にわたって学び、帰国を目前にした74年10月、海外伝道団体の年次大会で日本におけるキリスト教主義のリベラルアーツカレッジの設立を訴えました。この訴えは感動を呼び、5千ドルもの寄付が集まりました。

帰国して同志社英学校を設立した新島は、学問の追究だけでなく、知識と品行があり、「自ら立ち自ら治める人民の養成」を目指しました。この志こそ、大切に継承していくべき精神です。

新島の教育観で見逃せないのが女子教育です。76年に女子塾(翌年、同志社女学校)を開校しました。1923年には女学校の卒業生4人を大学本科生として受け入れました。女子学生が入学した私立大学は同志社が最初です。

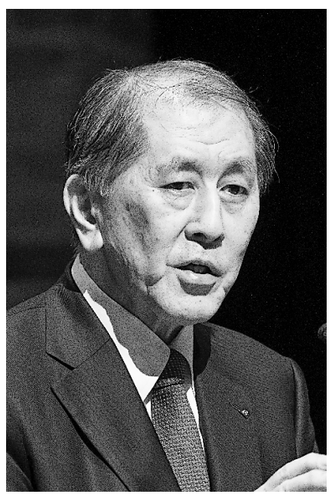
創立150周年は、過去の積み重ねを振り返り、現在の課題を明確にし、未来のビジョンを描く好機ととらえています。根幹にあるのは良心教育です。自らの信念に基づいて行動し、他者や社会に責任を果たす人物を養成することにほかなりません。同志社小学校の校歌(作詞・谷川俊太郎)に「えらいひとになるよりも よいにんげんになりたいな」とあり、ここに考え方が凝縮されています。

少子化を迎え、今の進学率で計算すると18年後の大学入学者は45万人となり、現在の定員より18万人少なくなります。厳しい環境下、建学の精神と独自性を力強く打ち出すことが不可欠です。

かつて勝海舟に「同志社の教育の完成には何年かかるか」と問われ、新島は「数百年かかるだろう」と答えました。道のりは遠くても、良心教育の意義を明確にし、その良心を社会の中で発揮する人間の育成が求められていると考えます。

横断的な学びで 世界貢献

早稲田大学総長 田中愛治さん



たなか・あいじ 1951年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。米国オハイオ州立大学大学院政治学研究科修士博士一貫コース修了(Ph.D.)。世界政治学会(IPSA)会長などを歴任。2018年から現職。日本私立大学連盟会長も務める。

2032年に創立150年を迎えますが、50年までの早稲田のあるべき姿を目指して今秋から記念事業を進めます。

その際に立ち返るのが建学の精神です。「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」。そして創立者大隈重信が大切にした言葉が「一身一家 一国の為のみならず 進んで世界に貢献する抱負が無ければならぬ」です。これらは研究・学問で真理を追究し、それに基づいた教育で学生を育て、その人たちが人類社会に貢献するというものです。

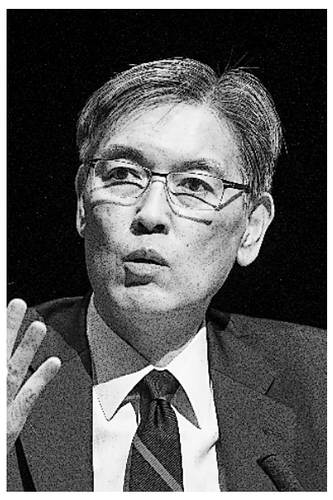
この形を実現するため、学部の垣根を越えた教育の司令塔「グローバルエデュケーションセンター(GEC)」があり、昨年4月に研究の司令塔「グローバルリサーチセンター(GRC)」を設立しました。貢献の司令塔には「グローバルシチズンシップセンター(GCC)」があります。

GECでは昨年度、データ科学履修者が文理を問わず1万8千人を超えました。GRCでは、日本医科大と連携した自然災害での人命救助▽ビッグデータ解析による戦争・紛争の防止▽文理融合による気候変動問題の解決などの研究を進めています。

32年に年6600人の学生を海外に送り出し、1万人の学生を海外から受け入れることを目標にしています。40年までに、人類社会に貢献し活躍しようとする学生にとって日本で最も効果的な教育を受けられる大学になり、50年までにはアジアで最も効果的な教育を受けられる大学になることを目指しています。

高い志 時間かけ育む場に

慶応義塾長 伊藤公平さん



いとう・こうへい 1965年生まれ。慶応義塾大学理工学部計測工学科卒業、米国カリフォルニア大学バークリー校工学研究科修士課程・博士課程修了(Ph.D.)。2017年、理工学部長・大学院理工学研究科委員長。21年から現職。

今どのぐらいの若者が志を持っているか。志がなければ社会を正しい方向に向かわせることができません。

志は、スポーツや楽器、語学と似ていて若い時に機会を持てるかどうかで相当左右されるものだと思います。若い時に自分の時間を大切にして、いかに没頭できるかが重要です。

いま大学では、AI(人工知能)でも法律でも学びたい授業をとことん学べる。交換留学制度も数多く準備されており、スポーツの環境も整っている。活用しようとする人にとっては最高の場が用意されている。

一方で少子化が進み、昨年の出生数は約70万人。それなのに高度成長モデルで人を取り合おうとしている。どんどん学生は採用活動をしかけられ、若い人が自分の成功や失敗を振り返ったり、海外を見たりする時間がなくなっている。

同志社の創設者新島襄は5歳で書道、10歳で馬術や剣術、15歳で蘭学なども学び、21歳で米国に渡る。帰国して同志社を設立したのが32歳です。

福沢諭吉も同じです。14~15歳で書物を読み始め、19歳で蘭学に出会い、20歳で緒方洪庵の適塾で学ぶ。慶応義塾の始まりとなる塾を江戸で始めたのが23歳。そして、咸臨丸に乗り込み、米国で学び、欧州を巡りました。

このような高い志を持つ人間をいかに育てるか。大学は就職の予備校ではありません。自分の考えをじっくりと深め、志を育む時間と環境をつくっていく。このことがいま、高等教育に求められています。

パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、国内外の高等教育や少子化時代の私学のあり方について意見が交わされました。(進行は藤えりか・朝日新聞社朝デジ事業センター戦略部次長)

国際的競争力 私学は自覚を

田中さん

――私学の独自性や役割をどう考えますか。

田中 日本の学生数、大学数とも約8割は私立大学です。私学がしっかり教育しないと国や社会の国際的競争力が落ちていくことを、すべての私学が自覚することが大事です。

国立は国のために人材を育てる。私学は建学の精神がはっきりしており、新島も福沢も大隈もそうだが、世界人類のために人を育てることを考えられる。国に縛られず、自由に幅広く考えられる私学の良さをいかしていくべきでしょう。

八田 大学定員は国公立約13万人で、私立が約50万人。私学間の競争とともに、国公立大とも競争している。私学は建学の精神を掲げ、独立性や自主性、機動性を持って教育している。この独自の教育システムを社会に訴えていけることが強みです。

学費の問題では、収入や子どもの数によって支援が受けられる国の「修学支援新制度」ができたので、私学も国公立との差が縮まって競争を進めていけるのではないでしょうか。

伊藤 欧州の大学はごく一部を除いてほぼ100%が国立で、大学は社会が支えるものという考えから授業料がほぼ無料。米国は私立もあるが約7割の学生が州立大学に通っている。日本は特殊で8割の学生を私立に任せる選択をしてきた。そもそも国公立の役割、私立の役割は何か。国立と私立で目指すところに違いがない大学もあるので、今後議論になるところだと思います。

――少子化にはどう対応していくのでしょうか。

八田 大学に対する国の交付金・補助金は全体で1兆円を超えているが、私立約600校には2800億円。私学の財政は多くを学費収入が支えていますが、少子化でどんどん少なくなってきます。

私学がどう生き残るかと同時に、国公立をどうすべきかも考えるべきでしょう。特に地方の小規模私学は厳しい状態にあり、私学全体で考えていく必要があります。

田中 日本は高度成長期に高等教育を受ける人間を急速に増やす必要があった。その多くを私学が担う政策をとり、私学が増えました。

文部科学省は、自律的に改革を進めて工夫する私学は支援すると言っています。私は設置形態ではなく、地域振興や特色ある教育、研究水準など機能や目的に着目して支援してもらいたい。私学の方も何が得意なのかを考え、それに特化して特色をいかすことが大事だと思います。

「幸せ」から 教育考える必要

伊藤さん

伊藤 大学の生き残りではなく、日本の生き残りのためにどういう教育体系をつくっていくかを考える必要があります。

偏差値というカーブで考えると、最も数が多い50前後の人が生涯にわたってハッピーで胸を張って活躍していけることが大切です。「就職が大変だ」と学生たちが言っているのは、1、2割の大企業に就職しないと失敗だと勘違いしている。様々な立場で尊敬されて責任と生きがいを感じていける社会をつくる必要があります。何が幸せな日本をつくっていくのか。大学入試を含めて考えていく必要があります。

――3人とも留学経験があります。大学の国際化や人材育成をどう考えますか。

田中 海外から来た人が早稲田で学び、教える。一方で、学生も海外へいくことが大事で、学部生全員が一度は留学を経験することを目指しています。海外でその国の学生と一緒に学んで日本を外から見つめる。そのことが将来社会を引っ張る学生を育てることになると考えます。

異文化との交流を 積極的に

八田さん

伊藤 世界を見ることで、日本の良さや進むべき道を考えることができると思います。イソップ物語に「ウサギとカメ」の話がありますが、日本では地道に努力するカメが主役なのに対し、米国ではウサギが主役で、怠けてしまうとカメに負けるよという見方になります。

突っ走るウサギを止めるための制度やガバナンスを輸入しても、地道に進むカメにはうまく当てはまりません。世界を見てきて初めて、このウサギとカメの違いを考えることができるのではないでしょうか。

八田 違う文化の中で勉学することで得られるものは大きい。大学では積極的に学生を海外に送り出し、また海外から迎え入れています。学校法人として国際化に対応するため、同志社国際中学・高校を設置し、授業の65%を英語で実施する国際学院初等部も開校しました。人々や社会のために貢献したいという志を実現するための学びの場をこれからも提供していきたいと考えています。

少子化や進学負担 トップの議論大切

会議を終えて

参加者から事前に寄せられた質問・意見は約300。目立ったのは少子化に伴う変化や格差への懸念だ。「環境の違いで受けられる教育の質に差が生じているのでは」(20代)、「(3校に)進学させるにはやはり相当な収入が必要」(60代)などの声に、足元の不安の高まりを感じた。

八田英二・同志社総長・理事長は「地方の私学がなくなれば地方の高校生には大きな負担。国としても危機感を」と訴えた。田中愛治・早稲田大学総長は奨学金を挙げ、「経済的な理由で諦めないで」。そのうえで伊藤公平・慶応義塾長は「豊かな人生や社会をつくる若者たちの特権としての時間」の大切さを唱えた。

簡単でない、と言われるかもしれない。でも、励みになり刺激を受けた参加者も多かったのでは。市井の声と共に、大学の垣根を越えトップが語る場の大切さを改めて感じた。(藤えりか)

朝日教育会議2025

先進的な研究や教育に取り組む大学などと朝日新聞社がともに、様々な社会の課題について考えるフォーラムで、2018年から開いています。各界から専門家を招き、「教育の力で未来を切りひらく」をテーマに、ご参加いただく方々と一緒に解決策を模索します。

これまでの概要はウェブサイト(https://aef.asahi.com/2025/)でご覧になれます。

学校法人同志社

新島襄が1875年に京都で設立。現在は同志社大学、同志社女子大学のほか、四つの高校・中学校、小学校、国際学院、幼稚園を含む総合学園に。「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」の教育理念のもと、一貫教育を行っている。今年創立150周年を迎え、記念ウェブサイトでこのシンポジウムの動画を含め、多彩な情報を発信している。